

「えどがわ能」開催に添えて

見所の多い一日、ほんの一部のご紹介ですが、ご活用頂けましたら幸いに存じます。

まず、能楽を演劇として鑑賞する際の豆知識です。

◇演目共通のみどころ

何も道具の置かれていない能舞台を眺めて、「思い浮かべて」ください。

柱に囲まれた立方体の舞台空間、この空間がこれから如何様に彩られていくのか。

能楽では、予め大道具などを整えた舞台創りを控えるため、始めは何も無い舞台がさらけ出され、入退場も演出の一つ。次第に変化する舞台空間にご着目ください。そして、いざ上演が始まれば、演者に焦点を合わせることも、引いて眺めることも、お客様に委ねられ、観る者が際限なく自由に色彩を感じられることでしょうか。地謡(コーラス)、囃子の演奏がおりなす臨場感、ただ独りが立ち舞う静寂な情景描写や心情表現を、そして穏やかに流れる時間を、読書のように想像して頂く事で彩りが増してゆくことでしょうか。数秒かけて一息を創り、一年間を一時間に集約していくような、ゆったり且つ凝縮された描写をお楽しみください。

それでは、皆様に多くの情報を舞台から汲み取って頂けるように、事前にお伝えする○秘レジュメ、お届けいたします。

◇当日の演目のご紹介

さて、能は200番(曲)以上の演目が現存しており、1番毎に特徴を持ちます。

演劇の楽しみ方として、「構成の理解」や「移り変わりを素直に受け留める事」は大事な要素です。どんなにゆっくりを感じる場面でも、舞台上には流れがあり、起承転結・喜怒哀楽・時間の変化といった、様々な流れが観る人の感性に響くものです。芸能の本質は、古典と現代の違いは少なく、無言のうちに「あとさきの布石」で彩られてゆくのが表現です。是非とも当日は、舞台から目を離さないように、このレジュメは上演中には閉じてご鑑賞ください。

「鼎談」 素のままの能楽師、日常的に交わされる会話をお楽しみください。

◇能と狂言について（能楽は能と狂言の総称です。）

「能」と「狂言」は奈良時代から共に歩んできた芸能で、同じ能舞台を表現の場とし、つがいで上演したり、一つの演目を共有(共演)することがあります。

狂言「二人袴」

髯(おこ)入りの日、初めて妻の実家に訪れます。舅(しゅうと)は髯がやってくるのを心待ちにしていますが、一人での訪問を心細く思う髯は、父親を連れ立って舅の家までやってきます。父親は長袴をはかせ送り出しますが、門前で見守っているところを見つかってしまい、舅に挨拶しなければならないことに。しかし長袴を持ち合わせておらず、父親がとる行動とは。

おおらかに流れる舞台の様子をお楽しみください。

◇能と仕舞（しまい）

フルコース料理を「能」とすれば単品メニューが「仕舞」です。仕舞は絵画で言うとデッサンにあたり、装束・囃子で彩ることなく、紋服姿で謡と舞のみにて上演され、「能の一場面」を表現します。なお、謡のリズムには、拍子に合うものと合わないものがあります。 ※ 別紙

仕舞「西王母」 春の演目

能では、西王母が穆王の宮殿に天降り、不老長寿の仙桃を献上し、舞を舞うことで聖代の栄えを寿ぎます。西王母が漢の武帝に与えたという三千年に一度、実のなる桃。西遊記では、孫悟空が王母の園に育った桃を盗んで食べる話が語られています。仕舞では、春の陽気に舞い戯れる様子をお楽しみ頂きます。

・詞章 大ノリ 西王母『 地【

『花も酔へるやさかづきの 【花も盃へるや盃の。手先づ遮る曲水の宴かや御溝の水に。たはむれ戯る、手弱女の。袖も裳裾もたなびき鬢く。雲の花鳥。春風に和しつ、雲路に移れば王母も伴ひ攀ちのぼる。王母もともなひ登るや天路の。行くへも知らずぞ。なりにける

仕舞「杜若」 夏の演目

金春禅竹（世阿弥の娘婿にあたる人物）の作品で、幽玄を強く感じられる一番です。伊勢物語を題材に在原業平の「かきつばた」五文字を句頭に詠んだ「から衣 着つつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ」に因み、草木の精を主人公とし、和歌の功德による草木の成仏を伝えます。仕舞では、穏やかな謡と舞の流れをお楽しみください。

・詞章 大ノリ 杜若ノ精『 地【

『匂うつる。菖蒲の鬢の 【色は何れ。似たりや似たり。杜若花菖蒲こずゑに鳴くは 『蟬のからころもの 【袖白妙の卯の花の雪の。夜も白々と。明くる東雲のあさ紫の。杜若の。花も悟の。心開けて。すはやいまこそ草木国土。すはや今こそ草木国土。悉皆成仏の御法を得てこそ。失せにけれ

仕舞「橋弁慶」 秋の演目

史実（義経記）を題材に、五条大橋で牛若丸と武蔵坊弁慶が初めて対峙する場面を現しますが、能では主役を武蔵坊弁慶に仕立てる趣向で創作されています。大人と幼子が相まみえる様子の独特な躍動感を観るままにお楽しみください。

・詞章 詞・平ノリ・中ノリ 弁慶『 牛若丸「 地【

『弁慶かくとも白浪の。立寄り渡る橋板を。さも荒らかに踏鳴らせば 「牛若彼を見るよりも。すはや嬉しや人来るぞと。薄衣なほも引被き。傍に寄添ひ佇めば 『弁慶彼を見つけつゝ。言葉をかけんと思へども。見れば女の姿なり。我は出家のことなれば。思ひ煩ひ過ぎて行く 「牛若彼を弄ってみんと。行違ひさまに長刀の。柄元をはしと蹴上ぐれば 『すは。志れ者よ物見せんと 【長刀やがて取りなほし。長刀やがて取直し。いで物見せん手並の程と。斬ってかゝれば牛若は。少しも躁がずつつ立直って。薄衣引除けつゝ。志づゝと太刀抜放って突っ支へたる長刀の。切先に太刀打合せ。詰めつ開いつ戦ひしが。何とか志たりけん。手許に牛若寄るとぞ見えしが畳み重ねて打つ太刀に。さしもの弁慶合せかねて。橋桁を二三間。志さって。肝をぞ消したりける。あらものゝしあれほどの。あら物々しあれ程の。小姓一人をさればとて。手並にいかで洩らすべきと。長刀。柄長くおっ取延べて。走りかゝって丁と切れば。背けて右に。飛違ふ取直して裾を。薙払へば。躍り上って足も躡めず。宙を払へば頭を地に着け千々に戦ふ大長刀。打落されて力なく。組まんと寄れば。斬払ふ縫らんとするも便無し。せん方なくて弁慶は。希代なる少人かなとて呆れ果て、ぞ立ったりける

能「景清 松門之会釈」 無季の演目

史実にも猛者として名高い景清。平家の滅亡の後、世の行く末を憂いて自ら両目を穿ち盲目となり日向（宮崎）で静かに過ごしています。そこへ、鎌倉に残されていた娘が、遙々父を尋ねて訪れます。景清は落ちぶれた今の姿を恥じて娘を避ける親心を、また遊女との間に娘として生まれた身の不遇を嘆く子、両者の感情描写は二番目物（武将の演目）のなかでも特異な演出で、魅力溢れる作品です。また「鍛引き」の様子は、在りし日の武勇を今に残す名場面です。

※「松門之会釈(しょうものあしらい)」は追加演出(小書)を現します。

◇舞台展開（詞章） シテ『 ツル[[トモ[ワキ(地【

※ 冒頭に舞台に運ばれる庵は布ぐるみの間は舞台に存在しない約束です。

～鎌倉から日向への旅 ツル[[トモ[同吟[[

[[消えぬ便も風なれば。消えぬたよりも風なれば。露の身いかになりぬらん

[[これは鎌倉亀が江が谷に。人丸と申す女にて候。さても我が父悪七兵衛景清は。平家の身方たるにより。源氏に憎まれ。日向の国宮崎とかやに流されて。年月を送り給ふなる。未だ慣はぬ道すがら。もの憂きことも旅の習。また父故と心づよく [[思ひ寝の涙かたしく。草の枕露を添へていと滋き袂かな。相模の国を立ちいで、。相模の国を立出で、。誰に行くへを遠江げに遠き江に旅舟の。三河に渡す八橋の。雲居の都いつかさて假寝の夢に馴れてみん假寝の夢になれてみん [漸う御急ぎ候程に。これははや日向の国宮崎とかやに御着にて候。これにて父御の御行くへを御尋ねあらうずるにて候

※ 鎌倉を旅立つ人丸一行、宮崎までの長い旅路を穏やかな謡で表現します。

～景清の独り言 シテ『 地【

『松門獨り閉ちて。年月を送り。みづから。清光を見ざれば。時の移るをも。辨へず。暗々たる庵室に徒に眠り。衣寒暖に與へざれば。膚は嶮岨と衰へたり 【とても世を。そむくとならば墨にこそ。背くとならば墨にこそ。染むべき袖のあさましや囊れ果てたる有様を。我だに憂しと思ふ身を。誰こそありて憐の憂きを訪ふ由もなし憂きを訪ふよしもなし

※ 景清は庵で一人ごちています。藁屋の布が降ろされて庵の存在が表現されます。

～一行の訪問 シテ『 ツル[[トモ[地【

[[不思議やなこれなる草の庵古りて。誰住むべくも見えざるに。声珍らかに聞ゆるは。若し乞食の在るか。軒端も遠く見えたるぞや『秋きぬと目にはさやかに見えねども。風の音づれ何ちとも [[知らぬ迷のはかなさを。暫し休らふ宿もなし 『げに三界は所無し唯一空のみ。誰とか指して言問はん。又いつちとか答ふべき [いかに此の藁屋の内へもの問はう 『そもいかなる者ぞ [流され人の行くへや知りてある『流され人にとりても。苗字をば何と申し候ぞ [平家の侍悪七兵衛景清と申候 『げにさやうの人をば承り及びては候へども。もとより盲目なれば見る事なし。さも浅ましき御有様。うけたまはりそゞろに哀を催すなり。委しき事をば。餘所にて御尋ね候へ [さては此あたりにては御座なげに候。これより奥へ御出であって尋ね申され候へ 『不思議やな只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば。此の盲目なる者の子にて候はいかに。われ一年尾張の国熱田にて遊女と相馴れ一人の子を儲く。女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ。鎌倉亀が江の谷の長に預け置きしが。馴れぬ親子をかなしみ。父に向って言葉をかはす 【声をば聞けど面影を見ぬ盲目ぞ悲しき。名のらで過ぎし心こそなか、親の絆なれ なか、親のきづななれ

※ 庵へ問う一行をあしらう景清の内心が独白にて表現されます。

～里人との対面 トモ[ワキ(

[いかに此あたりに里人のわたり候か (里人とは何の御用にて候ぞ [流され人の行くへや御存候(流され人にとりても。いかやうなる人を御尋ね候ぞ [平家の侍悪七兵衛景清を尋ね申候 (只今

此方へ御出で候山陰に。藁屋の候に人は候はざりけるか [その藁屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ (のう其の盲目なる乞食こそ。御尋ね候景清候よ。あら不思議や。景清の事を申して候へば。あれにまします御ことの。御愁傷の気色見え給ひて候は。何と申したる御事にて候ぞ [御不審尤もにて候。何をかつ、み申し候ふべき。これは景清の息女にてわたり候が。今一度父御に御対面ありたき由仰せられ候ひて。これまで遙々御下向にて候。とてものことに然るべきやうに仰せられ候ひて。景清に引合はせ申されて給はり候へ (言語道断。さては景清の御息女にて御座候か。まづ御心を鎮めて聞しめされ候へ。景清は両眼盲ひましまして。せん方なさに髪をおろし。日向の勾当と名を付き給ひ。命をば旅人を頼み。我ら如き者の憐みをもって身命を御つぎ候が。昔に引変へたる御有様を恥ぢ申されて。御名のりなきと推量申して候。某只今御供申し。景清と呼び申すべし。我が名ならば答ふべし。其時御対面あって。昔今の御物語候へ此方へ渡り候へ

※ 橋掛りで対話をすることは舞台と別の場であることを表現しています。

～景清への再訪 シテ『 ワキ(地【

(のう、景清のわたり候か。悪七兵衛景清のわたり候か『喧まし、、、さなきだに。故郷の者として尋ねしを。此の仕儀なれば身を恥ぢて。名のらで帰す悲しさ。千行の悲涙袂を朽たし。萬事は皆夢の中の徒し身なりとうち覚めて。今は此の世に亡きものと。思ひ切ったる乞食を。悪七兵衛景清なんど、。呼ば、こなたが答ふべきか。そのうえ我が名は此の国の【日向とは日に向ふ。日向とは日に向ふむかひたる名をば呼び給はで力なく捨てし梓弓。昔に帰る己が名の。悪心は起さじと。思へども又腹立や『ところに住みながら【所に住みながら。御扶持ある方々に。憎まれ申すものならば。ひとへに盲の杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として。腹悪しく由なき云事ただ容しおはしませ『目こそくられけれど【目こそ暗けれども。人の思はく一言のうちに知るものを。山は松風。すは雪よ見ぬ花の覚むる夢の惜しさよ。さて又浦は荒磯に寄する波も。聞ゆるは。夕汐もさすやらん。さすがに我も平家なり。物語始めて御慰みを申さん

※ 里人の問い詰めにより、奮い立つ心と豊かな感性の描写が現わされます。

～父娘の再会 シテ『 ツレ[[ワキ(地【

『いかに申候。只今はちと心にかかる事の候ひて。短慮を申して候御免あらうずるにて候 (いやいやいつもの事にて候程に苦しからず候。又われらより以前に。景清を尋ね申したる人はなく候ふか 『いやいや御訪より外に訪ねたる人はなく候 (あら偽を仰せ候や。正しう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひしものを。何とて御つつみ候ふぞ。あまりに御痛はしさにこれまで御供申して候。急いで父御に御対面候へ [[のうみづからこそこれまで参りて候へ。怨めしや遙々の道すがら。雨風露霜を凌ぎて参りたる志も。徒になる怨めしや。さては親の御慈悲も。子によりけるかや情無や『今までは包み隠すと思ひしに。顕れけるか露の身の。置處無や恥かしや。御身は花の姿にて。親子と名のり給ふならば。殊に我が名も顕るべしと。思ひ切りつ、過すなり。我を恨と思ふなよ【あはれげに古は。疎き人をも訪へかして怨み誹るその報に。正しき子にだにも訪はれじと思ふ悲しさよ。一門の船のうち。一門の船の中に肩を並べ膝を組みて。所狭くすむ月の。景清は誰よりも御座船に無くて叶ふまじ。一類その以下武略さま、に多けれど。名を取楫の船に乗せ。主従隔なかりしは。さも羨まれたりし身の。麒麟も老いぬれば驚馬に劣るが如くなり

※ 父娘の対面が果たされ、景清の老いを恥じる様子、娘の想いが対比されます。

～合戦の様子 シテ『 ワキ(地【

(あら痛はしやまづかう渡り候へ。いかに景清に申し候。御女御の御所望の候 『何事にて候ぞ (屋島にて景清の御高名のやうが聞こしめされたき由仰せられ候。そと御物語りあって聞かせ申され候へ 『これは何とやらん似合はぬ所望にて候へども。これまで遙々来りたる志。あまりに不便に候程に。語って聞せ候べし。此の物語過ぎ候は、彼の者をやがて古里へ歸して給はり候へ (心得申候。御物語過ぎ候は、やがて歸し申さうずるにて候 『いで其頃は寿永三年三月下旬のことなりしに。平家は船源氏は陸。両陣を海岸に張って。互に勝負を決せんと欲す。能登の守

教経宣ふやう。去年播磨の室山。備中の水島鶴越に至るまで。一度も身方の利無かつし事。ひとへに義経が謀いみじきに因ってなり。いかにもして九郎を討たん。謀こそあらまほしけれと宣へば。景清心に思ふやう。判官なればとて鬼神にてもあらばこそ。命を捨てば易かりなと思ひ。教経に最期の暇乞ひ。陸に上れば源氏の兵。餘すまじとて駆け向ふ 【景清これを見て。景清これを見て。物々しやと。夕日影に。打物閃めかいて。斬ってかゝれば堪へずして。刃向いたる兵は四方へばっとぞ逃げにける逃さじと 『さもうしやかたゞよ 【さもうしや方々よ。源平互に見る目も恥かし。一人を。留めんことは案のうち物。小脇に搔込んで。なにがしは平家の侍悪七兵衛。景清と。名のり掛け名のりかけ手捕にせんとして追うて行く。三保の谷が着たりける。兜の鍔を。取りはづし取外し。二三度。逃延びたれども。思ふ敵なれば逃さじと。飛びかゝり兜をおっ取り。えいやと引く程に鍔は切れて。此方に留れば主は先へ逃げのびぬ。はるかに隔てゝ立帰りさるにても汝。恐ろしや。腕の強きと云ひければ。景清は三保の谷が。頸の骨こそ強けれと笑ひて 左右へ退きにける。

※ 鍔引きの再現によってかつての勇壮な景清が今に現れます。

～再度の別れ 地【

【昔忘れぬ物語。衰へ果てゝ心さへ。乱れけるぞや恥かしや。此の世はとても幾程の。命のつらさ末近し。はや立ち帰り亡き跡を。弔ひ給へ盲目の。暗き所の燈火悪しき道橋と頼むべし。さらばよ留る行くぞとの。唯一声を聞き残すこれぞ親子の形見なるこれぞ親子のかたみなる

※ やがて親子は別れて、独り日向に残る姿で終曲する。

※ 演出の都合上、当日の詞章に多少の差異が生じることがございます事、ご了承ください。

八拍子

(八)
一
二
三
四
五
六
七
八

	・
	い
	ろ
	は
	に
	ほ
	へ
	と
	ち
	り
平	ぬ
ノ	る
リ	を
	・

	・
	い
	ろ
	は
	に
	ほ
	へ
	と
	ち
	り
	ぬ
	る
中	を
ノ	わ
リ	か
	よ
	・

		・
	丨	
	ち	い
	り	ろ
	ぬ	は
	る	に
	を	ほ
大		
ノ	わ	へ
リ		
	か	と